

The Whisper from Amherst



エミリーのささやき

エミリー・ディキンソンの研究者の一人で、講演ために金ヶ崎町を訪れたこともある武田雅子氏がエミリーの詩に初めて出会ったのは10代の頃だったそうです。

武田氏が中学生の頃(1960年代だと思われます)、お母さんが購読していた「婦人画報」に詩のページがあって、そこで紹介された詩の中にエミリーの詩がありました。その後、高校生の時に愛読していた「ジュニア・それいゆ」という隔月刊誌にも英詩のページがあり、その中でもエミリーの詩との出会いがあったそうです。そのように、いくつかの小さな偶然の出会いがきっかけで研究を生業としている人が他にも大勢、しかも世界中にいるなんてエミリーは想像もしていなかったと思います。まして岩手県の小さな町、金ヶ崎の町民が一生懸命エミリーの詩を原文で読んだり、訳詩を通して思いの丈を理解しようとしているなんて思いもよらなかったでしょう。

今回は、武田氏が思春期に出会った詩を1つ紹介します。

‘A word is dead’

A word is dead

言葉は 口にされたら

When it is said,

死んでしまうと

Some say.

言う人がいる

I say it just

私は言おう

Begins to live

正にその日

That day.

言葉は 生き始めるのだとー

(編集工房ノア「エミリーの詩の家」 武田 雅子 著より)